

Kappa Novels



この本をお読みになった方へお願い

あなたはこの本を読まれて、どんな感銘を受けられたでしょうか。「読後の感想」を左記あてにお送りいただけましたら、ありがたく存じます。なお、このほかにも、「カッパの本」ではどんな本を読まれたでしょうか。このつきには、どんな本を読みたいとお考えですか。

この本には、一字でも誤植がないようにと願っておりますので、もしも、お気づきの点がありましたら、あわせてお教えください。お手紙には、ご職業や年齢なども書きそえてくださいませんか。

東京都文京区音羽二

光文社

神吉晴夫

長編推理小説 ^{かい}会 ^{しゃ}社 ^ぐ喰 ^いい

昭和41年11月25日
昭和42年3月10日

初版発行
15版発行

検印廃止 円 300

著者 ^さ佐 ^が賀 ^{せん}潜

東京都中央区銀座6の4
交詢社ビル5階502号

発行者 神吉晴夫

印刷者 磨田照雄

東京都文京区水道2-4-26

慶昌堂印刷

発行所 東京都文京区音羽2 株式会社 光文社
振替東京115347

落丁本・乱丁本は本社でお取替えいたします。(明景堂製本)

表紙の模様・意匠登録 116613

© Sen Saga 1966

長編推理小説

会社喰い^ぐ

さ が せん
佐 賀 潜



カッパ・ノベルス

目次

第一章	社長の行方不明	5
第二章	会社戦争の実態	31
第三章	札束を売る銀行	57
第四章	愛人と社長軟禁	82
第五章	桃井産業の攻撃	108
第六章	国華商事の防戦	134
第七章	銀行と会社の枷	158
第八章	倒産会社の虚実	181
第九章	探索と幻の札束	204
第十章	金融暴力の構図	229

本文のイラスト

永^{なが}田^た

力^{りき}

第一章 社長の行方不明

1

國華商事株式会社の社長荒尾信太郎は、愛用のビュイックのコムバクト・カーに乗りこむと、社長室長の柳正春と視線を合わせ、口もとをゆるめてうなずいた。

柳が、正面入口から路上に降り立ち、深々と頭を下げるのを眺め、車の人となった。へこの男は、気のきいたやつだわい。来年あたり、重役に引き上げてやろうと思っていた。

車が走り出した。

荒尾は、後ろを振り向いた。八階建ての白亜のビルが、夕陽をうけ、茜色に染まった空へそそり立ち、その下で、柳が佇立したまま見送っているのを確認すると、へ忠臣とは、柳のような男をいうのだらうと、声を沈めてつぶやいた。

自動車は、昭和通りを、築地へ向かっていた。五時を回ったばかりの時刻なので、自動車の洪水だった。荒尾は、進まぬ車にいらだちながら、何度も腕時計を覗いた。

その日は、夕刻六時から、正信銀行の副頭取永井忠に招待され、帝国ホテルで会食があったが、荒尾は、「急用ができた。すまんが、きみが出てくれ」と言つて、専務の国友清一郎に、出席を代わってもらった。

荒尾の会社は、正信銀行から金を借りていた。三月十五日に迫った借入金返済について、二カ月延期を頼んだが、頭取の黒沢秀丸から、「きみ、そりゃ困る。返すもんはいったん戻してから、改めて、貸借の相談をしようじゃないか」と言われた。

去年の秋、荒尾が、光陽銀行の七億円と三星銀行の四億円の借財について、強く返済を要求されているとき、まるで救世主のように、正信銀行が現われ、両銀行の債権を肩替わりしてくれた。おまけに、二億円の貸増しまでしてくれた。

それが昭和三十九年九月十六日で、二億円は、社長の世田谷区梅ヶ丘の自宅九百八十平方メートルを、抵当に入れ、期限を六カ月と決めた。その返済が、約束どおり

実行できないので、延期を申し入れたのだ。

黒沢頭取から断わられると、三日目になって、永井副頭取から、「例の件で、今晚、飯を食べないか」と誘われた。荒尾は銀行の首脳部に、会いたくなかった。話の結論はわかっていたからである。

荒尾が永井副頭取との会食を国友専務に代わってもらったのは、そのほかにもう一つ理由があった。女だ。若い女、前川由美のもとへ訪ねていく約束があった。

前川由美は、二十一歳。国華商事株式会社へ、去年の春、入社したB Gだった。すでに男子社員三十一名、女子社員四十名の新入社が決定した後なので、前川由美の入社をためらったが、社長室長の柳正春から、「ぜひとも……」と頼まれ、採用を決定した女だった。

荒尾は、前川由美を、一目見たとき、ある種の野望を持った。というのは、都会の空気に汚染されない新鮮な魅力を持っていたからだ。

美容院へ行ったことがないと思われる髪は、長いまま無造作に束ねたままで、襟足にもこめかみにも、後れ毛がまつわっていた。やや赤みを帯びた肌は、指先で触れてみたくなるほどの艶と光を持っていた。正面からみると、ややまるみのある顔だが、横顔を眺めると、中高

で、うるみのある切れ長の眼が美しかった。動作が緩慢で、おっとりした口のきき方をする。それでいて、メンタルテストの答えは、びっくりするほど正確だった。

荒尾は、前川由美を秘書課勤務ときめ、毎日、由美の観察をつづけた。

「前川君、結婚は考えとるんだらうな」

「そんなこと……考えたことも……ありません」

「まさか、生涯、独身主義でもあるまい」

「そりゃ、そうですけど……でも、私、若い男性は、きらいなんです」

「おや、どうしてだね」

「私、頭がわるいでしょう。……だから、若い人では……とても、だめなのです。お年寄りの方なら……甘えることができますから」

「ほう、気になることを言うね。で、なにかい、年の違う男と、正式な結婚がしたいと言うのかい」

由美は答えず、大きく眼をみはった。荒尾はぶるっと身震いをした。由美の眼に、異状な光がみなぎっていたからだ。

荒尾は椅子を立つと、由美の手を握った。その手は子どものように小さく、頑丈な荒尾の手の中で溶けてしま

うほど、柔らかだった。

荒尾の意思が固まった。へこの女を、自分のものにしてみよう。荒尾は、若者のように息をはずませ、由美を抱きしめた。由美は詰まった声を立て、身もだえしていたが、やがて荒尾の腕の中で力を抜いていった。

その夜、荒尾は由美を連れだし、ホテルの一室で抱いた。由美は処女ではなかったが、五十五歳の荒尾の高度のテクニクによって、悶絶するほどの反応を示した。

肌の弾みも、感応の度合いも、男を狂喜させるものだった。荒尾は由美を退社させると、高輪台のマンションに住まわせた。六カ月まえのことである。

由美が荒尾に語った経歴によると、柳橋の芸者と株式仲買人の間に生まれ、高校を卒業した年の春、母親が病死し、栃木県西郡須野の母の実家へ引き取られ、町役場へ勤めていたが、遠縁にあたる柳正春を頼って上京した——ということだった。

非処女については、役場勤めをしているころ、上役にだまされたと説明した。

荒尾信太郎は、いわゆる女ぐせの悪い男だった。二十五歳から女道楽をはじめ、数えきれぬほど女を抱いてきた。

その中で、本妻のほか、三人の女が定着していた。二号の木村芳江はすでに四十を一つか二つ越した女で、もと、新橋の芸者だった。赤坂福吉町に「きむら」という料亭を経営させている。

三号の新庄かな子は三十六歳の女で、もと、銀座のバーのホステスだった。現在、銀座六丁目に、「カナコ」というバーを経営させている。

四号の橋本のぶ子は三十二歳の女で、取引先の食料品問屋橋勘商店の娘だった。その店が資金繰りに困っているとき、二千万円の融資をしてやったのがきっかけで、深いつながりを持った。当時のぶ子は、二十七歳で、美容学校の講師をしていた。べつに美人というわけではなかったが、のぶ子が処女であることに心を動かし、自分の女にしてしまった。のぶ子には、五反田で美容院をやらせている。

荒尾は、二号の芳江に十年もまえから魅力を失い、三号のかな子のあくの強い夜の行為に厭き厭きし、四号の橋本のぶ子が中年太りとなり、腹部にたるみをつけているのを眺めただけで、醜悪なものさえ感じ出していた。

そんな折り、由美を手に入れた。

由美は新鮮だった。抱けば大きな荒尾の体の中に隠れ

てしまふほど小柄だったが、由美は、男を有頂天にさせる天性の素質を持つてゐるようだった。女の容貌の美しさを欲するのは若いころだけのようだ。荒尾のように初老の年になると、肌を交えたときの適合性だけで、女の良否を決めるものらしい。

荒尾は由美に、文字どおり心魂を傾けた。彼を夢中にさせたのは、由美の若さと、得がたい体の造型ばかりでなく、その性格にも原因があった。

由美は、いわゆるしとやかな女だった。感情の起伏がなく、荒尾の世話をすることが、楽しみに見えるほど、親切な気持ちをやきとどかせた。荒尾は、日を重ねるに従い、感情のはむらを燃え立たせていった。

それでいて、由美の夜のしぐさは、狂気かと思えるほど熾烈だった。へこれが二十一の女かと思えるくらい、何時間でも荒尾にむしゃぶりついた。興奮の極限を一夜に十数回くりかえし、やがて失神し、昏々と眠りに落ちてしまふ。

荒尾ほどの経験を積んだ男でも、辟易することがしばしばだった。が、一夜すぎれば、もとのやさしい女に戻り、かいがいしく、荒尾の身の回りの世話をする。荒尾は引きずられるように、高輪台へ足を向けてしまふので

ある。

荒尾が由美に精力を傾けた理由は、夜の行為の異常さだけではない。彼女の持つおだやかな雰囲気と、身に備わった品格から、一緒にいるだけで、心安まる思いがしたからだ。

「私、花嫁衣装を着て、結婚したいわ」

由美は、とつぜん、思い出したように、そんな言い方をした。

「ほう、だれか、若い男でもできたんかい」

荒尾は、とまどいながら由美の顔を眺めた。由美の眼がきらきら光り、筆筒の上に並べてあるこけし人形を睨んだ。

「そんな人、おりません」

「ぼくとの生活に厭気がさしてきたんか」

「そんなこと……」

「まさか、ぼくと結婚式を挙げるわけにもいかんだらう」

「わかつておりますの。でも……女って、ふうつと寂しくなることが……」

「そんなもんかね」

「ね、私に、赤ちゃんを生ませて……」

荒尾は、眼をみはった。

「困ったな、今さら、ぼくが……」

「私、社長さんの赤ちゃんが、生みたいのです。……どんなに楽しいかしら……」

「ほう、きみは、変わったひとだね」

「うふふ。いいわ、今のままでもいいのよ。私、しあわせよ」

荒尾は由美の心の中を覗いたような気がした。由美は、迷っている。体で、荒尾にまつわりつく行為は、由美が自覚を持った行為ではない。由美の持つ天性の欲望の強さが行為させるだけで、精神は、絶えず荒尾以外の男を求めている。荒尾は半年経って、そんな結論を得た。

荒尾にも反省があった。

二十一歳の由美の生涯を、すでに初老の域に踏みこんだ自分が、ただ欲望を満足させるため、犠牲にしているのだろうか。たしかに、このごろ、自分でも自覚できるほど、性欲がおとろえはじめた。

ホルモン剤、精力剤を、やたらに飲んでいるが、由美を知った当初と比べると、行為の意欲が減退してきた。

荒尾はその原因を、会社の経営困難のためだと、自分の

心に言い聞かせた。由美と枕をならべ、足をからませていても、みなぎってくるものがない。ともすれば、頭の中に、会社経理の数字がちらついてくる。

荒尾は現実的な想念を振り捨て、由美の小麦色の裸形を眺め、弾みのある四肢をまさぐってみる。黒い茂りに顔を埋めずめ、ほのぼのとした芳香に、強いて精気をふるい立てることが多くなった。

荒尾の肉体的な衰えと反比例して、由美に対する心の傾斜は、色濃いものとなっていた。会社経営に、苦慮すればするほど、由美を、手放したくない思いがつのつた。

日本橋小網町の本社ビルは、三年まえ、新築したばかりの明るい近代的な建物だが、荒尾の社長としての座は、絶えず黒い影におびやかされていた。無理な膨張政策がたたって、赤字の累積は覆うべくもなかったし、従弟にあたる専務の国友清一郎が虎視眈々と社長の追落としを狙っているのだ。

荒尾は、ほとんど連夜由美のマンションへ通った。昨夜も夜の十時ごろまで由美を抱いていたが、帰るとき、「あすも、六時には来るからね」と言っただけで、荒尾ははっとした安

らぎを覚えた。由美の話題は、荒尾にとつて、たわいのないものだったが、戦場から逃れ帰り、妻のふところに抱かれた兵士のような安堵感があった。

桑の木でできた大きな三面鏡が欲しいの——とか、いっぺん絞りの着物を着てみたいの——とか、日本じゅうをドライブしてみたいわ——というように、自分の娘から、おねだりをされるに似た話が多かったが、荒尾は眼を細めてうなずいていた。

その日も荒尾は、正信銀行の副頭取との会食だったので、心をとがめるものがあつたが、国友専務に代役を頼み、逃げるように由美のところへ向かつたのだ。

由美が住むマンションは、港区二本榎町にある。高輪警察から明治学院へ向かい、閑静な住宅街を左折した通りにある焦茶色の鉄筋五階建ての、貸しマンション榎荘である。その二階、二十二号室が由美の部屋である。

荒尾は、いつものとおり高輪ゴルフセンターへ、乗用車で乗りつけると、車を帰宅させた。運転手に由美の居所を知られたくなかつたからだ。運転手には、——ここにゴルフバッグが預けてあるから、練習をやり、友人たちと落ち合い、夕飯を食べてから帰る——と説明してあつた。二号から四号までの妾宅は、いつの間にか運転手

に知られてしまい、大っぴらになつていたが、由美の隠れ家だけは、知られたくなかつた。社長たる者が二十一歳のBGをかこつた——と噂されるのがいやだったからである。

したがって、荒尾と由美との関係を知っている者は、社長室長の柳正春だけだつた。少なくとも、荒尾はそう信じていた。柳と由美は親戚の間柄だし、由美の入社も退社も柳が取りはからつていたからだ。荒尾は、「前川由美のことは、絶対に口外するな」と、柳に口止めしておいた。柳も、「ご心配なく。由美が、お役に立つて、よろこんでいます」と、慰めに答えた。つまり、社内では、柳以外に知っている者はいないし、柳は腹心の部下だつたので、他に洩らす心配もないわけだ。

荒尾が由美の存在にそれほどまで、神経をとがらしているのは、正信銀行の首脳陣の耳にはいれば、会社経営が苦しいのに、女狂いをしている——と、言われるのが辛かつたからだ。さらに、国友専務に知られるのもいやだつた。もう一つの理由に、脱税を、その筋から狙われている状況が看取されていたからだ。

正式に国税局の調査班が乗り込んできたわけではないが、荒尾個人の取引先の銀行を、国税局の調査課の者が



調べているとの情報がいっていった。荒尾は親しい銀行員からその知らせを聞いたとき、ぎょっとした。調査は深く突っこむことなく終わったが、なんとなく無気味だった。いつ調査班から査察班へ移され、強制捜査がはじまるかもしれないと思うと、不安で仕方がなかった。そんな気持ちから、由美のマンションを知られまいとする警戒心を強めたのである。

荒尾は、自分の車がUターンして帰っていくのを、フロントの待合椅子から確認すると、急いで外へ出た。あたりはすでに暮色がたれこめ、外灯がつき、ラッシュ時の自動車が列をなしていた。荒尾は大通りに出てから、狭い路地を左へ曲がった。生け垣やブロック塀がつき、茂った庭木が路上にはの暗い闇をつくっている。

荒尾は急いだ。

長身の股をとぼし、路地を出はずれ、幅員五メートルの道路に出た。その通りを左折し、百メートルほど行った右側に榎荘がある。焦茶色のビルが眼にはいった。二階の二十二号室のあたりを眺めた。灯りがついていて、薄緑色のカーテンが風にゆれている。コンクリート塀の中央に入口があり、その手前に、黒色のトヨベツトが停まっていた。

荒尾がその脇を通りすぎようとしたとき、自動車の陰から男が二人とび出してきた。荒尾は本能的に身構えた。

脇腹を石塊で殴られたような激痛を感じた。荒尾は息の詰まる呻きを上げ、たたらを踏んだ。倒れかかる荒尾は、みぞおちのあたりを手拳で突かれ、俯伏せのまま、崩れ落ちた。

荒尾は、そのまま意識を失った。

昭和四十年三月初めのことである。

2

社長室長の柳正春が、荒尾社長の方行不明を知ったのは、翌日の午前十時を過ぎてからだ。

その日、十時から、本社の三階の会議室で、重役会が開かれることになっていた。正信銀行から五億円を借り出すことと、脱税対策が議題だった。

定刻十時に、専務以下十名の重役が集まった。国友が何度も腕時計を覗き、苦い表情で一座を見まわした。

「社長、おそいですな」

と、常務の岡林辰五郎が言った。

「会社が重大な時期に、社長は、どうやら、若い愛人におぼれているようだ。そのため、昨夜の永井副頭取との会食もすつぽかし、ぼくに出ると言われ、ご自分は、あたふたと出ていかれた。副頭取は、国華商事が、現状のままであるかぎり、金は出さん——と言い切っておられた。ぼくは、返答につまって、ただ、頭を下げ、哀訴嘆願につとめたよ」

国友は、青白い顔の眉間に縦皺をよせ、低い声でしゃべった。経理部長で、常務取締役の平松銀之助が、上体をのり出した。

「専務さん、それで、銀行じゃ、うちの会社の現状を、どうしろと言うんです？」

平松の表情に困惑の色が掠めた。

「具体的には聞かしちゃくれんのだ。が、ともかく、現首脳部不信の色が濃いようだ」

国友の薄い唇に、冷たい笑いが浮かんた。

「はつきり言えば、社長更迭を望んでいるからだと思う。銀行としちゃあ、十三億円の貸し金があるからといって、社長更迭を命ずるわけにもいかんでしょう。自発的にやれ、新社長になったら、考えてやろう——というのが、銀行の腹じゃないんですか」

岡林常務が太った体を前へかがめ、国友専務の顔色をうかがいながら、語尾に力をこめた。並みいる平取締役は体を堅くし、専務と二人の常務の会話に耳を傾けていた。

両常務の国友専務に対する口のきき方は丁重で、専務と常務という対等に近い立場からみると奇異な感じさえする。

国華商事は、社長の荒尾と、専務の国友と、長いあいだ対立をつづけ、重役から社員にいたるまで、二派に分かれていた。

その理由は、荒尾社長就任のいきさつに根源があった。国華商事株式会社は、明治の末期、国友竜一郎が創立した会社である。罐詰かんづめの輸出と皮革の輸入で業績をあげ、しだいに業種をひろげ、原料糖、油脂原料を輸入し、やがて国内販売用の罐詰から、インスタント食料品、木材、衣料、雑穀類まで手をひろげ、総合商社として大きくふくれ上がってきた会社である。

国友竜一郎に協力し貿易面で才腕をふるったのは、社長の実弟荒尾金太郎だった。子どもの折り、横浜の貿易商荒尾正久まさひさの養子となり、養父の死後その後を継いだ。昭和期の初め、実兄竜一郎の経営する会社と合併

し、現在の国華商事株式会社をこしらえた。

竜一郎が社長、金太郎が専務となり、兄弟力を合わせ、会社を大きくしていった。昭和二十五年七月、竜一郎社長が八十六歳の高齢で死亡した。死の病床にあるとき、竜一郎は弟金太郎に遺言した。

「わしのたった一人のせがれ、清一郎は、まだ大学生じや。したがって、わしの死後、社長は、あんたがやってくれ。そして、清一郎が一人前になったら、三代目社長は清一郎にゆずってくれ。頼む」

金太郎はこれを承諾した。遺言どおり荒尾金太郎が二代目社長に就任した。彼は七十三歳で社長になり、昭和三十五年三月、退任するまで、文字どおり死にもの狂いで働いた。資本金は二十五億円となり、社員も二千四百人にふくれ、年間の売上げも三千億円を越えるほどの大商社となった。

金太郎は老齢を理由に会長職となり、兄竜一郎の遺言があつたにもかかわらず、自分の長男信太郎を社長の座に据すえてしまった。へ会社は、株主のものである。先代社長の遺言があつたとはいえ、弱輩じやくはいで力のない清一郎を社長にするわけにはいかん。わしの子ではあるが、信太郎には実力がある。会社を背負っていけるからじゃ」と

いうのが、信太郎を社長に据える理由だった。

そのころ、信太郎はすでに五十一歳で、会社の専務をしていた。慶応義塾大学の経済学部を卒業すると、米国のプリンストン大学で商品学を三年間学び、国華商事のニューヨーク支店に八年間も勤務し、帰朝すると、取締役となり、常務を経て、専務という順序で、社長コースを歩んできた。

国友清一郎は先代社長の二号の子である。本妻に子どもがなかったので、生まれるとすぐ国友竜一郎の嫡出子として出生届がなされた。頭が良く、東京大学法学部を出ると、三年間だけ、総合商社としてはCクラスに属する丸長物産株式会社に勤務し、実務を覚えた。二十五歳の春、国華商事へ戻され、一年間、総務部にいたが、平取締役、常務を経て、信太郎が社長に就任すると、専務となったのである。

信太郎が社長になるについては、会社の主力銀行でもあり、大株主でもある光陽銀行のバックアップがあったからだ。国華商事の銀行は、光陽のほか、三星銀行だった。融資額もこの二行が、九十パーセントを占め、受取手形の割引もほとんど二行に限られていた。

社内に社長派と専務派の対立ができたのは、昭和三十

九年春ごろからである。清一郎は、いつの日にか、信太郎社長を引きずりおろし、自分が社長の座にすわろうと考えているようだった。

「社長は、どっちかといえばお人好しだ。専務は、腹が黒いぞ」

というのは、社長派と目される社員たちの評価である。

「社長は、ルーズな人だ。専務は、折目正しく、ごまかしがない。これからの経営は、専務のほうがいい」

というのは、専務派と目される社員の評価である。

これらの評価が当たっているとされる社員の評価があった。荒尾社長は機会あるごとに、裏勘定を作ろうとした。販路の拡張や、外国商社を手なずけるための資金に充当しようとしていたからだ。

国友専務は、裏勘定を極度にきらっていた。運動費は、なんらかの名目で経理から落とせばいい。B勘は、大会社のやるべきことではない——というのが、国友の持論だった。

毎年決算期がくると、二人は、粉飾決算をめぐる対立した。国華商事は、ここ数年来、国内の取引先の倒産事件が四回もあり、その損害金だけで百億円近い穴をあ

けた。荒尾社長の積極策で、販路を拡張するため、弱体会社を傘下に抱えすぎたからだ。そのため、とうぜん、赤字決算をするはずのところ、荒尾社長は、光陽銀行の圧力に負け、粉飾決算を公表してしまった。欠損しているのに、利益があつたように、ごまかしの決算を発表したわけだ。

国友は、会社の人員を縮小し、手堅い取引だけに限定し、会社の再建をはかるべきだ——と主張したが、重役会で否決されてしまった。

そんな苦境時に、正信銀行が手を差しのばしてきた。すでに光陽、三星の両銀行とも、国華商事を見かぎっていたらしく、会社の首脳部が知らぬ間に、両行と正信との間でバトン・タッチが行なわれた。昭和三十九年九月のことである。

正信銀行が国華商事の主力銀行として登場するようにになると、社内の、社長、専務の対立は、激しくなったばかりでなく、国友清一郎の力が強まってきたようだ。

「正信銀行が、専務をバックアップしているからだ」
との噂がひろまった。

きょうの重役会は、重大な議題を審議する手はずになつていた。会社は正信銀行が五億円の貸出しをしないか

ぎり、支払手形を落とせないほど資金繰りに困つてた。月間二百五十億円もの取引高の中で、五億円はその二パーセントにすぎない金である。が、取引きの七十パーセントは手形であつた。受取手形の額と、支払手形の額がバランスを保ち、支手（支払手形）を落とすために、受手（受取手形）を落とす資金に充当するのだが、受手の期日が遅れていれば、たちまち資金が枯渇してしまう。総合商社は、物の生産と消費との中間に立ち、物の流通を本来の業務とするものである。経済が発展し、物の生産がふえれば、とうぜん、商社の活動分野が広まっていく。商社の利幅は低いが、流動する物資が膨大となるため、利益の集計も大きくなる。

ところが日本経済は、戦後十数年つづいた高度な成長段階から、安定成長の段階にはいつていった。昭和三十年前後の神武景気が下向線をたどり、いわゆる不景気風が吹いてくると、総合商社は敏感に反応を示し、物は動くが、儲からない時期に突入していった。

国華商事のようなBクラスの商社は、手痛いまで打撃をうける羽目となつたのである。

その日の重役会の議題の他の一つは、脱税対策だつた。経理部長の平松銀之助は、その事実をよく知ってい